

乙 第 号

對馬 英雄 学位請求論文

審 查 要 旨

奈 良 県 立 医 科 大 学

## 論文審査の要旨及び担当者

	委員長	教授	國安 弘基
論文審査担当者	委員	教授	野上 恵嗣
	委員(指導教員)	教授	鶴屋 和彦

### 主論文

The association of 5-year therapeutic responsiveness with long-term renal outcome in IgA nephropathy.

IgA 腎症における腎生検後 5 年間の治療反応性と腎予後の関連性

Hideo Tsushima, Ken-Ichi Samejima, Masahiro Eriguchi, Takayuki Uemura, Hikari Tasaki, Fumihiro Fukada, Masatoshi Nishimoto, Takaaki Kosugi, kaori Tanabe, Keisuke Okamoto, Masaru Matsui, Kazuhiko Tsuruya

Clinical and Experimental Nephrology 2022;26:797-807.

## 論文審査の要旨

IgA 腎症は、原発性糸球体腎炎の中で最も高頻度に見られ、比較的腎予後は良いとされる。しかし、一部に末期腎不全に至る症例が認められ、そのリスクを生検確診時に予測することは IgA 腎症の診療において重要な課題とされる。本研究では、腎生検により確診された IgA 腎症 563 例を解析しリスク因子を抽出した。その結果、20 年の follow up では 16.1%に腎不全が発生し、そのリスクとして寛解後の再燃や治療不応（非寛解）が認められた。さらに、蛋白尿，eGFR，メサンギウム増殖性病変，管内細胞増多，巣状糸球体硬化が再燃と相関する独立予測因子であった。

公聴会では、組織学的な再燃危険因子間の相互作用の機序や再燃の予防・早期発見について質問がなされ、IgA 免疫複合体沈着に惹起された炎症からの分節性硬化と内皮障害に伴う炎症物質の原尿内流出による半月形成という機序、および、検診や長期にわたる follow up の重要性が回答された。

本研究は、IgA 腎症のハイリスク群に対する予測因子を多数例の長期観察のデータから抽出することに成功している。生検確診時に認められる臨床的・病理学的なハイリスク予測因子を用いることで、IgA 腎症の病状を過小評価することなく最適な治療を可能にする重要な研究と見なされる。

## 参 考 論 文

1. Association of initial prednisolone dose with remission, relapse, and infectious complications.

Kaori Tanabe, Kenichi Samejima, Fumihiro Fukata, Takaaki Kosugi, Hideo Tsushima, Katsuhiko Morimoto, Keisuke Okamoto, Masaru Matsui, Masahiro Eriguchi, Naoki Maruyama, Yasuhiro Akai, Kazuhiko Tsuruya. *Clinical and Experimental Nephrology* 2022;26:29–35.

2. Complement activation is associated with crescent formation in IgA nephropathy.

Hiroe Itami, Shigeo Hara, Kenichi Samejima, Hideo Tsushima, Katsushiko Morimoto, Keisuke Okamoto, Takaaki Kosugi, Takahiro Kawano, Kengo Fujiki, Hiromichi Kitada, Kinta Hatakeyama, Kazuhiko Tsuruya, Chiho Ohbayashi. *Virchows Archiv* 2020;477:565–572.

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに腎臓病態制御医学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

令和5年3月7日

学位審査委員長

分子腫瘍病理学

教授 國安 弘基

学位審査委員

発達・生育医学

教授 野上 恵嗣

学位審査委員(指導教員)

腎臓病態制御医学

教授 鶴屋 和彦